

冷戦時代のドイツの 視点から



法学部教授 妹尾哲志

せのお てつじ

ボン大学博士課程修了。専門は国際政治、ドイツ外交。著書に『戦後西ドイツ外交の分水嶺』（晃洋書房、2011年）、『Ein Irrweg zur deutschen Einheit?』（Peter Lang, 2011）、共編著に『歴史のなかのドイツ外交』（吉田書店、2019年）、共著に『競合する歴史認識と歴史和解』（晃洋書房、2020年）、『国際関係論の生成と展開』（ナカニシヤ出版、2017年）、『アメリカの核ガバナンス』（晃洋書房、2017年）、『歴史のなかの国際秩序観』（晃洋書房、2017年）、『教養のドイツ現代史』（ミネルヴァ書房、2016年）、『冷戦史を問いなおす』（ミネルヴァ書房、2015年）、『現代ドイツ政治』（ミネルヴァ書房、2014年）など。

ドイツといえば…

私の専門は国際政治で、研究テーマとしては20世紀後半の冷戦時代のドイツについて、特にドイツ連邦共和国（当時西ドイツ）の外交政策を研究しています。ドイツというと、ビールやワインにソーセージ、自動車やサッカー、あるいは童話や音楽といった芸術、などなど他にもイメージされるものは様々かと思います。歴史的にはやはりアドルフ・ヒトラーが率いるナチス・ドイツの印象が強いですか。近代以降日本との関わりも決して浅くなく、第二次世界大戦で敗れた後、復興から高度経済成長へと歩んだ道や、アメリカとの同盟関係などにおいて類似点を見出すことができるかもしれません。

しかし冷戦時代のドイツは、アメリカをリーダーとする西側陣営と、ソ連を頂点とする東側陣営の激しい対立の最前線に位置し、分断国家としてそれぞれ西ドイツとドイツ民主共和国（東ドイツ）が睨みあっていました。ヨーロッパ大陸は米ソ対立の舞台として「鉄のカーテン」によって東西に分断され、核兵器などの軍拡競争が展開される冷戦時代のきわめて強い制約下において、分断国家の西ドイツがどのような外交政策を展開したのかを研究テーマとしています。

西ドイツの「東方政策」に注目して

特に注目してきたのが、1969年に西ドイツの首相に就任するヴィリ・ブラントが進めた「東方政策」です。ブラントは、1961年に「ベルリンの壁」が建設された際には西ベルリンの市長を務めていましたが、結果的に壁の建設を阻むことができなかつた西側同盟の対応に失望したと言われています。そこでブラント

は、アメリカをはじめとした同盟に過度に依存するのではなく、西ドイツ自らが積極的に東側に働きかけ、たとえば分断によって生じた離散家族の問題などを実務的に改善することを目指しました。それまで西ドイツは、対立する東ドイツをソ連による傀儡国家であるとしてその存在すら認めていなかったのですが、ブラントの「東方政策」では国家として認め、直接交渉していくことで事態の打開を図ったのです。こうしてブラント政権は、ソ連や東ドイツ、ポーランドといった東側諸国との関係改善を通じて、1960年代後半から70年代半ば頃に東西両陣営の間で対話が進む緊張緩和（デタント）に大きく貢献することになったのです。この功績が認められたブラントは、1971年にはノーベル平和賞を受賞しています。

「東方政策」への不安とその影響

しかしブラントの「東方政策」は、西ドイツ国内では激しい議論の対象となりました。冷戦時代の厳しいイデオロギー対立にあって、真っ向から対決してきた共産主義者と話し合うのは弱腰外交なのではないか。たとえば第二次世界大戦末期や戦後の混乱期などに、かつての旧ドイツ東部領から「追放」され西ドイツに逃げ延びてきた人々にとって、かつての故郷が共産主義者に支配されることは受け入れがたいものでした。ブラント政権が東側の政府と交渉を進め、これらの領土が東側に支配されることやその国境線を事実上容認することは、「追放」された人々にとっては故郷を売り渡す裏切りにほかならず、ブラントは「売国奴」であるといった痛烈な非難が浴びせられたのです。

また西ドイツがソ連や東欧諸国に歩み寄ることに



↑かつての「ベルリンの壁」(イーストサイド・ギャラリー)

対して、アメリカやフランスなどの西側同盟国は不安を持っていました。ブランドが行き過ぎた譲歩をするのではないか、冷戦下で築き上げてきた西側の結束を乱すのではないか、積極的なドイツ外交はヨーロッパの歴史においてトラブルの原因になってきた、といったように不信感を募らせたのです。ドイツに対する根強い警戒心が完全に消え去るわけではないのは、現在EU(ヨーロッパ連合)で影響力を増すドイツが抱える問題に通底するでしょう。

こうした様々な困難に直面しながらも、ブランド政権は同盟国との意見調整に努めつつ国内の反対を乗り越え東側諸国との関係改善を果たしました。このブランドの「東方政策」が、やがて1989年の「ベルリンの壁」の崩壊や東西冷戦の終焉にどのような影響を与えたのかという問題意識から、ドイツ留学中に取り組んだ博士論文をはじめとした研究成果を発表してきました。一方で日本帰国後は、ドイツの「過去の克服」への取り組みやヨーロッパ統合とのかわり、アメリカをはじめとした同盟関係などに関する共同研究にも声をかけていただいております。

「複雑怪奇」な「欧州情勢」の理解に向けて

こうした研究を進める方法としては、ドイツなど対象となる各国の外交文書をはじめとした一次史料を中心に用いて、当時の政策決定や外交交渉がどのように行われたのかを跡付けることに取り組んでいます。たとえば(今は新型コロナウイルスの影響で行くのが難しくなっていますが)調査で訪れるドイツでは、留学していたボンの文書館やベルリンの外



↑ボンのフリードリヒ・エーベルト財団の文書館

務省の史料館などで一次史料を収集し、あるいは現地の研究者らとの意見交換などを通じて研究を進めています。とりわけ一次史料に基づいて、当時は機密扱いであったり、関係者にとって「不都合な真実」になりかねない事実なども含めた調査を行うことは、多くの人に影響を与える政策の決定過程に迫る上で、そしてもし失敗したと評価される政策であればその失敗を繰り返さないためにも重要です。もちろんこうした研究を(「史料批判」を含めて)より充実させるためにも、史料の適切な管理が不可欠であることは言うまでもありません。

現在日本を取り巻く国際環境は流動的で不透明さを増しています。こうした状況は20世紀末に冷戦時代が終わり、いわゆるグローバリゼーションがより加速化していることを一つの背景としています。地理的に離れているドイツやヨーロッパの出来事を身近に感じることは少ないかもしれません。しかし混迷を深める国際社会を展望するために、その前の冷戦時代とはどんな時代だったのか、ドイツの歩みを通じて研究することで、日本との比較といった点にとどまらず、かつて日本が「複雑怪奇」と見誤ったとされる「欧州情勢」の多面性をより理解することに寄与できるのではないかと考えています。